



太田 知実 著『教員志望学生の不安や悩みをどう理解するかー現代アメリカにおける支援実践からー』

黒田, 友紀

(Citation)

研究論叢, 32:71-73

(Issue Date)

2026-06-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505526>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505526>



太田 知実 著

『教員志望学生の不安や悩みをどう理解するかー現代アメリカにおける支援実践からー』

黒田 友紀（日本大学）

はじめに

教員志望者が教師になるために、そして、教師であることを支えるために、教師教育、そして、社会は何ができるのだろうか。日本においても、教師不足が社会的な問題となっている現在、社会や教員養成機関から教員志望者に向けられる期待は大きい。その期待が高いほど、教員志望者がそれに応えられるかどうかという不安や悩みにつながる。

本書では、教員養成段階で学生の懸念や不安を的確に把握し、それらを緩和・軽減して、良い教員として育てることができるのかという問いのもと、人種の問題等について社会正義や公正を志向して教育活動を展開できる教員を育成することを目指す米国の教員養成・教員支援プログラムとその実践が分析されている。分析の方法・視点として、①教員志望学生の「否定的感情」、すなわち、人種問題への対応に着目し、教員養成担当者がそれをどのように理解し、どう向き合おうとしているのかと、②教員養成を構成する基本的な“場”がいかに地域社会へと拡張され、どのような実践が行われているかという点から検討が加えられている。

それでは、以下で本書の概要を確認したうえで、本書の学術的特色と研究の展開可能性について述べたい。

本書の構成と内容

本書は、著者が 2023 年 3 月に神戸大学に提出した博士論文「現代米国教員養成における志望者理解の転換と新たな支援実践の展開」

に一部加筆・修正を加えた著作であり、全 5 章と、序章、終章、補論から構成されている。

第 1 章では、米国教員養成をめぐる議論の全体像を確認したうえで、多様性と公正を志向する教員養成研究と実践を行う主導的な論者が、学生にかかる期待と、その前提となる学生理解のあり方が解明される。教員養成プログラムでは、非白人居住地域での実習を通じて学生が自らの白人性を自覚・反省し、人種をめぐる認識を修正することが期待されている。しかし、その期待とは裏腹に学生は否定的な感情を抱きがちであり、教員養成担当者がその感情を否定的に捉え、さらに厳しい期待をかけるという悪循環によって、プログラムが成功していない現状が指摘される。そこで、近年、学生に厳しい期待をかけるのではなく、学生の率直な思いや考えを丁寧に聞き取り、肯定的に理解する新しい実践が始まっていることが指摘される。

第 2 章では、ニューヨーク市立大学クイーンズカレッジでの実践として、教育実習とその省察に対するパフォーマンス評価を行う edTPA というスタンダード化された教員養成課程の修了判定制度において、大学が学生のニーズをいかに理解し、支援したのかが検討される。スタンダード化された評価システムは、学生に被抑圧感を抱かせる懸念があるが、当事例では学生のスタンダードへの率直な合格要求を受け止めてそれを出発点に据え、「社会正義」について学生の「一人称」から始まる主観的な省察を深めさせるための支援がなされていた。

第 3 章では、ボール州立大学における地域実習を主軸として展開された教員養成プログラムが検討され、地域住民が学生の非白人文化に対する否定的感情を否定・叱責せず、学生が安心できる環境を整え、そのうえで相互の信頼関係を構築し、学生が人種をめぐる認

識を修正していく実践が描かれている。その際、自分の弱さを自覚し、それが受け入れられる経験によって抑圧・被抑圧の構造を根本的に問い直すことにもつながりうるという。そして、従来、「理解すべき対象」「保護すべき対象」とみてきた実習地域を、「学校や教育を支える社会的基盤」という観点で捉え直し、地域住民とともに未来の教育の在り方を構想し、教育関係の再編を通じた社会変革を展望しうる点が指摘される。

第4章では、第2・3章での事例を通して学生の否定的感情を丁寧に検討し、学生が人種をめぐる認識の修正にあたり、“マジョリティとしての被抑圧感”を抱かざるを得ないことが指摘される。これを個人の努力や反省の不足ではなく認識修正の出発点として捉えること、そこには、自己をめぐる根源的な弱さに直面し、それを自覚して受容することが必要になることが示される。この過程を通して、不当な「権力性」とは区別される、学生が教員特有の「権威性」を適切に持つことを考え始められる可能性を指摘する。

第5章では、ニューヨーク市の貧困地域で、非白人保護者を中心とするNPO組織によって、若手教員支援制度の創設を促した事例が「親密圏」と「公共性」を軸に検討される。そこでは、保護者の私的経験を尊重し、否定的経験を共有することでつながる親密圏が形成され、そこで自己と他者のケアが可能となり、教員との関係を相互帰責から相互支援に転換する形で公共性が志向される。その結果、保護者が被抑圧感を共通項として、若手教員に対してその否定的感情に共鳴する形で支援プログラムが導入されたことが示される。

終章において、米国教員養成・支援の議論と実践の現代的到達点の特質と意義として、以下の3点が挙げられている。第一に、教員養成担当者の学生理解こそ見直す必要があり、

学生が抱く否定的感情はマジョリティとしての被抑圧感として捉え、認識修正の出発点として捉える必要があることである。第二に、教員養成の場が拡張されたことにより、保護者や地域住民による教員志望学生や若手教員に対する理解が転換し、権力関係の変容を目指す制度空間の再編を目指した教員養成・支援の可能性を見い出している。第三に、教員志望学生がマジョリティとしての被抑圧感を避けたり抑止したりすべきものではなく、むしろ教員養成・支援の実践において、マジョリティとしての被抑圧感を抱く場面を意図的につくりだし、その緩和を支えることが重要になると提起されている。

そして、補論では、教員志望学生の人種をめぐる認識の修正に対して叱責的・否定的であった、従来の実践や主導的論者の主張が、これまでの多文化教育論のなかで、地域と学校をめぐる本質的な矛盾や葛藤の解決や、民主化や社会構造の変革を見通すような教育活動にはつながらなかった点が示されている。

本書の意義と研究の展開可能性

本書の最大の特徴は、複合的な現在の教員養成の課題が検討され、実践が丁寧に分析されている点にある。そのなかでも、学術的な意義として、第一に、米国の現実社会で直面する人種問題に教員志望者と教師がいかに対応すべきかについて、米国の教員養成研究における「社会正義を志向する教師教育」の代表的で主導的な議論が検討され、研究の布置が示されていることである。補論において上記の主要な論者と多文化教育との関係も検討されており、米国の教員養成における現在の議論の到達点と限界性が明示されている。

第二は、教職における学生への期待と理解のなかで、学生の否定的感情に徹底的に向き合い、それを緩和しようとする実践が解明さ

れ、現代の若者論や“弱い個人”論を踏まえた教員養成の展開の在り方を提示していることである。また、教育制度研究として、ただプログラムを検討するだけでなく、その実態や機能に迫り、制度空間のなかで捉えようとする視点をもたらししている点でも独自性を有している。

第三に、地域に根差した教員養成から社会変革をもたらしようとする未来志向の試みを取り上げ、制度としての教員養成プログラムの広がり可能性を示している点である。そして、教員志望学生や教員だけでなく保護者や地域の人々が、人種や地域の問題について自分の声を持ったり回復したりするプロセスが組み込まれていた。教員養成に携わる一人として、教員養成プログラムに社会変革の積極的な意味を見出し、付与することの重要性を感じさせられた。

他方で、今後の研究の展開可能性として、いくつか質問や議論をしたい点もある。ひとつは、どのような条件や地域であれば、本書で示されたような教員養成プログラムを実施し、維持できるのかという点である。また、教員養成に携わる教員の在り方、とりわけ、人種や地域等に関する捉えやマインドセットが重要であるとき、そういった教師教育者はいかに育つのかという課題もあろう。地域に関する分析については、(佐藤仁・伊藤亜希子編著(2026)『多様性を志向する教師教育』明石出版、第10章でも行われているが、)このようなプログラムの広がりや、教師教育者の育成や変容の土壌についての分析の結果をさらに知りたく思う。

次に、教員特有の「権威性」について、教師志望者が“マジョリティとしての被抑圧感”を出発点として教師の権力性を自覚して脱却し、良質な「権威性」として発現できるよう省察し続けることが重要であると指摘されて

いる。本書では可能性として指摘されているが、良質な教師の権威とは具体的に何であり、どのように構成・形成されるのかについては、学生の“マジョリティとしての被抑圧感”の省察と併せて、教育実践の過程も同時に検討する必要があるのではないだろうか。

また、本書では、学生や「若者」に着目され、日本の文脈では青年期にも着目されているが、「成年教育」の視点から教員養成期や教職での学びを捉えることで、教職の課題がさらに広がりをもって継続的に検討できるのではないかと考えさせられた。

おわりに

以上、評者の個人的な関心に則って意見を述べたが、本書は、米国の教員養成研究において学術的な意義があるだけでなく、いかに教員志願者を育てることができるかについて、世界で共通にみられる課題が重層的に検討されており非常に示唆に富む。現在、第二次トランプ政権下において、人種問題やセクシュアリティを扱う社会正義や公正に関するプログラムを実施するのが難しくなっている点や、多様性やカラー・ブラインドが掲げられることにより逆に曖昧化され得る点に懸念もある。書評の執筆にあたり、本書で取り上げられた事例のように、地元に根差す未来志向の教員養成プログラムや実践が、確にかつ力強く広がり、研究がさらに深まることを期待しつつ、教員養成に携わる一人として、「私」ができる研究や実践を考えなければならないという気持ちを改めて抱かされた。教員養成関係者のみならず、保護者や地域の方々にもぜひ一読を勧めたい。

(学文社 2025年2月発行 本体価格3,400円＋税)